



営農NEWS



夏季に発生するネギやラッカセイ、コンニャクなどの白絹病に注意しましょう

夏季になると発病する白絹病は、近年、ネギなど多くの作物で発生増加の傾向がみられます。

白絹病の病原菌はカビの一種で、高温を好み、更に多湿状態のときに発病やまん延が拡大し、圃場では気温 25℃付近のときに多く発生するといわれています。

このため、初夏～初秋にかけて発生しますが、特に気温が高い乾燥状態の後に、長雨で土壌湿度の高い状態が続くと菌糸の伸長が促進され、多発生する傾向があります。

白絹病菌は多くの作物に感染する多犯性の病原菌ですが、特に問題となる作物として、県内ではネギやニラなどユリ科、トマトやピーマン、ナスなどナス科、キュウリなどウリ科、ダイズやラッカセイなどマメ科、ニンジン、コンニャクなどがあり、さらに多くの花き類、樹木類など多種類の作物で発病します。

主要な伝染源である前作の罹病部やその周辺に作られた菌核（茶褐色の粟粒大）は、地表上や比較的浅い土壌中で越冬し、好適条件になると発芽して密生した白色の絹状菌糸を伸長させ、作物の地際部を中心に侵入して発病します。このため、主に地際の茎部が侵された発病株は、生育が不良となり、葉の黄化や株が萎凋して、後には枯死してしまい、感染・発病した病斑部には再び菌核を形成します。

<防除のポイント>

1. 圃場の排水対策を行い、土壌表面が長期間加湿の状態にならないようにしましょう。
2. 白絹病の早期発見、早期防除により、発病まん延を防ぎましょう。また、発病の恐れがある圃場では、薬剤の予防散布に努めましょう。
3. 多量の未熟有機物を施用して腐熟が十分でない圃場では、特に菌糸が増殖しやすいので注意が必要です。
4. 次作以降の対策として、発病株は菌核を作る前に圃場から持ち出し、伝染源を残さないよう適切に処分しましょう。
5. 多発圃場は、還元型太陽熱消毒や土壌くん蒸剤による土壌消毒を行いましょう。
6. 菌核は水に弱いので、長期の常時湛水処理により死滅するとされています。このため、田畑輪換は有効です。

表 1 各種作物の生育中における白絹病の主な防除薬剤（平成 26 年 7 月 14 日現在）

薬 剤 名	対 象 作 物								
	ネギ	ニラ	ピーマン	シシトウ	コンニャク	ダイズ	エダマメ	ラッカセイ	その他
リゾレックス水和剤	○	○	○	○	○	○			キク、樹木類など
リゾレックス粉剤	○								うり類（漬物用）
モンガリット粒剤	○				○				
モンカット粒剤	○								
モンカットフロアブル 40	○		○※			○	○		花き類、樹木類
モンカットファイン粉剤 20DL	○				○				
フロンサイド粉剤	○	○						○	
ロブラール水和剤	○								
バシタック粉剤					○				

注) ※印の対象作物ピーマンは、ピーマン（露地）です。

なお、次作の白絹病防除対策として、各種の土壌くん蒸剤が農薬登録されています。これらは、各薬剤ごとに農薬登録の対象作物、処理方法、注意点などがそれぞれ異なりますので、登録状況を十分確認のうえ、作付け前の処理を行ってください。

農薬を使用する際は、ラベルに記載の登録内容、使用法、注意事項などを確認し、飛散に注意して使用して下さい。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040